

2019年度 入学試験問題

国語

(第4回)

[注意]

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
2. 解答用紙は、問題冊子の中にはさんであります。試験開始の合図があったら、解答用紙を取り出して受験番号と氏名を記入し、QRコードシールをはりなさい。
3. 解答はすべて解答用紙に記入しなさい。
4. 問題冊子の余白等は自由に使って構いません。
5. 試験終了後、解答用紙のみ提出し、問題冊子は持ち帰りなさい。

東京都市大学附属中学校



【注意】国語の問題では、字数制限のあるものは、特別な指示がない限り句読点等も一字に数えます。

1 次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

ぼくたちは、日々たくさん情報に接する。

「情報」とはなんだろうか？ まずそこから考えてみよう。

アメリカ中西部、見渡すかぎりの大草原。一匹のプレーリードッグが巣穴入り口の盛り土の上に立ち、周囲をじっと見回している――。

敵を察知すると犬のような鳴き声で仲間知らせる。警戒警報発令でみんな一斉に巣穴に逃げ込む。鳴き声には敵の種類や大きさ、それがワシなのかアナグマなのか、あるいはガラガラヘビなのか、脅威の度合いなどの情報まで含まれているようだ。一匹が「ゴカン」を使って集めた情報が、群れのメンバーを危険から守る。つまり情報をすみやかに得るかどうかは生存にかかわることなのだ。

【 A 】

【 B 】

【 C 】

【 D 】

東北で震度7、死者千人超／大津波襲来、不明者多数／M8・8、国内史上最大／福島原発に緊急事態宣言

11日午後2時46分ごろ、国内観測史上最大のマグニチュード(M)8・8の地震があった。

震源は三陸沖で、宮城県栗原市で震度7を記録した。最大10メートルの津波が発生、死者は千人を超すとみられる。各地で「カオク」が倒壊したり、流されたりした。

福島第1原発は炉の一つが冷却できない状態となり、政府は初の原子力緊急事態宣言を出した。放射能漏れは確認されていないが、半径3キロ以内の住民に避難を指示した。

これは2011年3月11日の東日本大震災の発生を伝える当日夜の共同通信の記事(抜粋)だ。

取材記者たちはこれまでに例のない大災害取材しようと、タクシーを借り上げるなどして、被災現場へと向かった。

丸1日以上たった現場は、津波でカオクすべてが押し流され、まるで「原爆が投下された跡」のようなモノクロの世界。携帯電話は通じず、宿も不十分。

被害の大きさ、家族も家も財産も失った被災者の体験と苦悩。聞くこと、見ることすべてが「ニュース」だった。さらにそこに、余震や津波が再び襲ってくるのではないか、原発事故への不安も広がる。

では、情報の受け手であるぼくたち市民はどうだったろう。必死で「本当の情報」を求め、特に原発事故をめぐる情報にはいらだち、口コミを含めて情報を探していた。

「直ちに健康を害することはない」という政府の発表、それを「タレ流すばかりのテレビの会見

場面、新聞報道を読んでも何を信用していいのかわからない。ことは放射能の問題、自分の命に
関わるかもしれないのだ。

「『直ちに』ということは、将来はあるという意味なのか?」「どうして東京に住んでいる外国人
は逃げ出しているのか」。

「マスコミは情報を隠している?」と疑った市民たちは、ちょうど世に出始めていたインターネッ
トの会員制交流サイト「SNS」(ソーシャル・ネットワークワーキング・サービス)に情報を求めた。
ツイッターなど個人が発する情報がリツイートで拡散され、それが引き金となってマスメディ
アが後追い情報を出すという事態もあった。

マスコミは、経験したことのない事態の中で、情報の精度に確信が持てず、パニックを引き起
こしてはいけなさとビビったのだ。科学的な用語や数字がわかりにくかった面もあった。でも、
市民の冷静さを信じて、わかりにくさも含めてでもいいから、もつと情報を共有化する方法があっ
たかもしれない。その結果本当にパニックが起きなかったかどうか今となってはわからないが。

このように、生命にかかわる緊迫した事態なんて、そうめったに起きるものではないと思うか
もしれない。しかし、ことは災害だけではない。社会の動きに無関心に生きていると、「直ちに」
ではなくても、将来困るような変化が起きているかもしれない。気がいたら「戦争」が目の前
にあるみたいなの……。

そのむかし、^② 海洋を航行する船は、昼は太陽の位置や風の方向、潮流の動き、陸地の影など
をとらえ、夜は星の位置を正確に測定して、自分の位置や時間を確認し、船を操縦した。これと
同じように、今の社会に生きるぼくたちも、まず自分のいる位置を知ることが重要だ。

そのためには、身の回りだけでなく、もつと広い社会の動きや出来事を知る必要がある。それ
が情報というわけだ。

情報は知識を増やすだけではない。自分が属している世界がどう動いているか、どんな仕組み
になっているかといった実態も表わす。そこには、情報をどう読むかという要素も実は加わって
くるのだが。

ぼくたちが生きている社会は X で、真実は必ずしもひとつとは言えないが、だからといっ
て、それに目をつぶり耳をふさぐこともできない。情報は、ぼくたちが社会でどう生き、どう動
かしていくか考えていくための唯一の ^{めいいつ} シン^dなのだ。

しかも、ぼくたちは情報を通していつもの確に判断、行動できるかというと、それが難しい。
人間には「感情」があるからだ。人間は感情の動物といわれている。常に冷静で絶対に判断を問
違わ^{ちが}ない人間なんているだろうか? いくら理性を働かせても、怒りがおさまらない時や、不安
で頭がいっぱいの時もある。「あの商品がなくなってしまう」「〇〇銀行がつぶれそうだ」という
デマやうわさは、そんな時に頭にスーッと入ってきて、ぼくらをパニックにさせたりもする。

こうも言える。人は見たいことだけを見て、聞きたいことだけを耳に入れる。そうやって入力
する情報を選別しているのだ。「信じたいことを信じる」「いやなことは認めたくない」というの

が人情。そうやって大事な情報を落つこととして、危険を察知し損ねたり準備が遅れたりする。

その上、ぼくたちは基本的に「自分は簡単にだまされたい」と思っているから始末が悪い。どんなに冷静で理性的な人にも「無意識」という領域がある。「意識」していないところで、ほめられたらよい気分になったり、気に入った物をけなされたりしたら気分を害したりするものだ。

情報を発信する側は、人びとの無意識の情感に訴えて、自分に有利になるように導こうとしているのだ。広告などは身近な例だ。耳に心地よい情報ほど要注意かもしれない、受け取る情報は、^③眉に唾をしてかからなければ、まんまと手玉に取られてしまう。

▼一方、人は予想できなかったことに基づかると、脳が刺激を受けて新しい発想を生み出す、ともいわれている。「よそ者、ばか者、若者」という言葉を知っているだろうか。古い考えから抜けだせない社会を揺さぶり、よみがえらせることができるのは、この3タイプの人間だという。古い常識にとらわれた大勢の者たちは変化を望むとしても、柔軟な発想が押しつぶされないことを願いたい。

多くのジャーナリストは、プロの「情報の伝え手」としての責任を持って、真実に肉薄しようとしている。情報操作に引ひ掛けられる「失敗」もときには経験する。出来事にどう対処し、どんな風からだを張るのか——そこには、きみたちが普段悩んで決断する時と同じようなプロセスがある。

毎日、テレビや新聞、インターネットで見聞きするニュースは、現実とかけ離れた向こうの世界の出来事ではない。だれかの身の回りで実際に起きていることだ。

先ほど例にあげたように、福島原発事故では、マスコミ情報への不信感から市民たちがSNSを駆使して立ち上がったケースだった。これを特殊ケースに終わらせず、これからも与えられる情報を鵜呑みにせず疑ってみてほしい。「情報の伝え手」を長年やってきたぼくがこんなことを言うのは矛盾していると思われるだろうが、「情報」とは完璧ではないのだ。

ニュースは受け取るだけでなく、共有するものになった。社会とうまく共鳴すれば「一人の意見が社会を動かす」パワーを持つ可能性もある。反対に、ゆがんだ情報にだまされてそれを拡散したら、パニックに加担してしまうことにもなる。

④メディアリテラシー（情報を読み解き、活用する力）を身につけた賢い（だまされない）情報受信者、発信者になろう。そこにはどんな落とし穴があるのか。社会の動きを伝えるジャーナリズムの今をできる限り具体的に説明し、未来を展望してみようと思う。世の中の一員としてどう行動し、どういう生き方をしていくかを常に考える……そういうきみたちに。

（三浦準司『人間はだまされる』より）

問1 —— 線 a～d のカタカナを漢字に直しなさい。送りがなが必要なものは送りがなも記すと。

問2 空らん【A】〜【D】には次の段落1〜4が入ります。文意が通るように並べかえて番号を答えなさい。

1 いまや人間の生きている社会はますます複雑になっている。自分を取り巻く世界を正確に知るためには、仲介者（メディア）を通したたくさんの間接的情報に頼らざるを得ない。しかもぼくたちは地球の裏側で起きたことにさえ無関係にすることはできない時代に生きているのだ。

2 それは人間にとっても同じだ。つまり「情報を得ること＝生存にかかわること」なのだ。

3 あふれる情報とどうつきあえばよいのか――

4 あるいは、古代、人里離れた人口約50人の小さな村に、よその土地からある人間がやってきたとする。よその村との交流がほとんどない時代。その当時の人たちにとっては、それは現代人が宇宙人に遭遇するほどの衝撃かもしれない。さらにその人間が、村になかったものを持ってきたとする。たとえばそれが新しい耕作方法だとしたら……。外からもたらされたたった一つの情報が村（共同体）を揺るがすことになる――。

問3 本文には表現を否定から肯定に意図的に変えたため論理の通らなくなっているところがか所あります。その部分を含む一文を▼より後の部分からぬき出し、はじめの五字を答えなさい。

問4 ——線①「必死で『本当の情報』を求め、特に原発事故をめぐる情報にはいらだち、口コミを含めて情報を探していた」とありますが、市民たちは東日本大震災を受けて混乱状態に陥りました。その理由を筆者はどのように述べていますか。ふさわしくないものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 マスコミが情報の精度に自信を持ってず皆で分かち合うことを躊躇したため。
- 2 政府の発表やマスコミ報道が市民たちの目にするのとかけ離れていたため。
- 3 市民たちは欲している情報をなかなか手に入れることができなかつたため。
- 4 マスコミが命にかかわる災害は起きないと市民たちに信じこませていたため。

問5 ——線②「海洋を航行する船」とありますが、この船にとっての太陽の位置や風の方向などは、冒頭で述べられたプリーリードッグにとっての鳴き声と同じ意味合いで述べられています。どのような意味ですか。文中より漢字二字でぬき出して答えなさい。

問6 空らん【X】に入ることばとして、最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 社交的
- 2 普遍的
- 3 画一的
- 4 多面的

問7 — 線③「眉に唾をして」とはどのような意味ですか。最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 緊張して
- 2 用心して
- 3 批判して
- 4 追求して

問8 この文章はメディアアリテラシーを身につけるために書かれた本の前書きです。この前書きの主旨をふまえて、後に続く本文の章立てを考えた時、ふさわしくないものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 情報は一人歩きする
- 2 情報化社会から撤退せよ
- 3 思い込みの壁
- 4 ジャーナリズムってなに？
- 5 だましのテクニクを見破れ

問9 — 線④「メディアアリテラシー（情報を読み解き、活用する力）を身につけた賢い（だまされない）情報受信者、発信者になろう」とありますが、後に挙げる具体例では「僕」が何をすることが「賢い情報受信者」「賢い情報発信者」ではないのですか。「傍線部以外の本文中」のことばを使い、それぞれ解答らんの「こと。」に続くよう、二十字以内で答えなさい。

具体例

僕が自分のスマホを見ると、近くの動物園から象が逃げ出して危険な状況だという情報を目にしたため、あわてて友人全員にその情報を送った。後になってわかったことだが、実は象が逃げ出したという情報は嘘であった。結果、動物園には数百件におよぶ苦情があり、それ以来入場客数が激減してしまったらしい。多くの人がこの情報を信じこんでしまったため、大変なことになってしまった。

(問題は次のページに続く)



2 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

陸上部に所属している「蒲池瑞希」は優秀な選手であり、新人戦の予選を突破し、県大会に駒を進めている。さらに一年生ながら駅伝の代表メンバーにも選ばれていた。しかし、全国大会の予選前にのぞんだ駅伝大会で家族の問題からパニックを起こして中継地点から突然姿を消してしまい、タスキがつけなくなったチームを失格にしてしまった。その後も練習を無断欠席していた。同級生の「歩」は、そんな瑞希をチームに連れ戻し、もう一度走らせるために先生に相談を持ちかけ、一年生全員で上級生達に謝罪することを決める。

ストレッチを終えて集合場所に行くと、後藤田コーチが車を回してきたところだった。

他の部員とは別に、新人戦に出場する[※] 畑谷さんを車に乗せて、門司陸上競技場へと行く^{ため}。いつもと同じ光景なのに、緊張^{きんちやう}しているせいで^① 胸が苦しくなる。

「さ、行くよ」

ユニホームに着替^{きが}えた瑞希の腕^{うで}を引き、皆^{みな}が集まっている場所へと進み出る。

それまでお喋^{しゃべ}りをしていた上級生達が、会話を中断した。

② 動きが止まり、笑顔^{えがお}が凍^{こお}りついた。

高瀬先生が少し離れた場所に立ち、バインダーに挟^{はさ}んだ書類^{しゆり}を読む振^ふりをして様子^{ようす}を窺^{うかが}っている。事前に根回しに行った時は「あまり期待するなよ」と[□]Aが、一応は心配してくれているようだ。

「よし、皆、集まったか？」

高瀬先生が部員達を呼び寄せる。さり気なさを装^{よそわ}うあたりが何だか白々しい。

「先生」

一歩、進み出た人がいた。

河合さんだった。

「何故^{なぜ}、競技者失格の人間がここにいるんですか？」

いきなり攻撃^{こうげき}表示^{ひょうじ}だ。

救いを求めるように[※] 南原さんを見たが、目が合った途端^{とたん}、小さく首を振られた。絶望的な気持ちになる。皆に納得^{なつとく}してもらえなかったのだ。

「大会を放棄^{ほうき}した上、皆に謝りもせず、大事な時期に部活を何日も休む。そんな人間を簡単に受け入れるんですか？」

高瀬先生は「ふうっ」と大きな息を吐いた。そして、瑞希に視線をやった。

「蒲池、何か言う事があるやろ？」

「……申し……訳ありませんでした」

青い顔で言葉を震^{ふる}わせる瑞希を、河合さんは厳しい目付きで睨^{にら}んでいる。南原さんも無言。駄目^{だめ}だ。上級生達の反応は良くない。

やっぱり、稔の言う通りだ。甘かった。

「今日は皆さんに謝りにきました。自分でも、何で、あんな事をしてしまったのか……。あの後、^③自分で自分が嫌いやになつて、どうなつてもいいと思つて……。無断で休んでしまいました。でも、休んでいる間に分かりました。私、走りたいんです」

いつも言葉が少なく、内に籠こもりがちな瑞希が、しっかりと自分の言葉で謝り、最後にはこれ以上ないぐらいに腰こしを曲げて頭を下げた。

「お願いします、次は必ず頑がん張ります。全国に行くお手伝いをさせて下さい。もう一度、私にチャンスを下さい」

「チャンス？」

河合さんのこめかみが、膨ふくらんだ。

「冗じゆうたん談はやめてっ！ チャンスは二度ないの」

ぴしゃりとした物言いに、私まで **B** しまった。

「こないだの大会だつて勝てるチャンスだったのよ。あなたにとっては単なる通過点だったかも知れないけど、新人戦やインターハイに縁えんのない選手にとつては、あれは大事な試合だった。あなたは、そのチャンスを潰つぶしたのよ。自分さえ良ければいいの？」

後ろに立つ上級生達も頷うなずいている。

「河合先輩せんぱいの言う通り」

「あーあ、次がある人はいいね」

「無理に居てくれなくても結構よ」

二年生達までもが河合さんに同調している。畑谷さんですら腕組みをし、助け舟たすけぶねを出そうとしない。

「おいおい……」

見かねた高瀬先生が口をはさんだ。

「みんな、少しは瑞希の気持ちを考えてやれ。南原は本人から話を聞いとるんやろ？ ちゃんと説明したんか？」

南原さんの横で、河合さんが目を吊つり上げています。

「ナンちゃんからは事情を聞きました。でも、許せないものは許せない。後藤田コーチにも伝えましたが、これが全員の意見です！」

思わず「ああー」と呻うめいていた。

「な」と、稔が横から肘ひじで小突こついてきた。

^④グラウンドにはうなだれる瑞希の影かげが薄うすく伸びていた。それも、雲おほが覆おほい隠かくしてしまう。

「本当の事を言えば、そのユニホームだつて着て欲しくない」

「そうそう」

瑞希は今、港ヶ丘の名が入った陸上部のジャージを着ている。瑞希は上着の裾すそを掴つかみ、唇くちびるを囁ささ

み縮めていた。

河合さんが止めの一言を口にした。

「いつまで、そこに立ってるつもり？ 皆、あなたを歓迎していない」
普段は南原さんの影に隠れている河合さんが、いつになく厳しい。

——苦勞しとる人やもんなあ。河合さんは……。

駅伝のメンバーに選ばれて、更衣室で声を殺して泣いていた河合さんを、皆が応援していた。
(高校に入ってから、怪我に泣いたもんね。腐らずに、よく頑張った)
南原さんも、そう言っつて河合さんを労っていた。

——ずっと故障で大会に出れんで、最後の最後にチャンスを掴み取った。そんな人から見たら、ふざけんなって思うんやろう。瑞希の態度は……。

瑞希に目をやった。

河合さんからの拒絶と、上級生達の態度は瑞希にも大きなショックを与えたようで、紙のように顔が白くなっている。

「……分かっています。自分が、どれだけ大変な事をしてしまったのか。謝って済む事じゃないのも……」

最後は涙声になり、ぼたぼたとアスファルトの上に雫がこぼれた。

堪らず、稔の腕を掴んで駆け寄った。「おい、おい」と稔が抗議の声を上げたが構わなかった。本郷さんに大村さん、栗も続いた。

五人で瑞希の前に整列し、一斉に頭を下げた。

「お、お願いします。蒲池さんは、私達に必要な人なんです」
もちろん、部にも必要だが、歩にとつても瑞希は心の支えだ。

だが、全員で謝つても上級生達の心を動かす事はできなかった。いや、余計に河合さんの怒りに火をつけてしまった。

「そんな子を頼りにするぐらいなら、自分達の競技能力を上げた方がいいわよ」
通りかかった生徒達が足を止めて、何事かと見ている。

「もつと自覚を持ちなさい。三年……、いえ、実質二年半の競技生活なんて、あつという間だから。『まだ一年生だから』なんて気でしたら、何もできないまま高校生活が終わってしまう」

河合さんの言葉は重く、暗い気持ちになる。

その時、南原さんが動いた。

「蒲池……。それから、皆も」

歩達の顔を上げさせる。

「駅伝を走る。それが、何を意味するのか考えた事ある？」
一年生の顔をぐるりと見回す。即座に稔が答える。

「自分の為でなく、他の選手の事まで考えて走る中で、部員同士の結束を固めるんです」

「うん。皆、できてる。でも、蒲池だけが分かってない」
瑞希が唾を呑み込んだ。

「勝つとか、負けるとかじゃない。それ以前の事が、全然できてない。たとえば、大会で勝てたとしても、今のままじゃ駄目」

たとえば、勝てても駄目。

それは、どういう意味なんだろう？ 河合さんは無言で頷いているし、誰も口をはさまない。何とも言えない気詰まりな雰囲気、高瀬先生が終止符を打った。

「そろそろ、いいかな？ 練習を始めたい」

先生の一言で、緊張していた空気が少し緩んだ。

「ええっと、だな……。本人がやりたいと言ってる以上、無理に退部はさせられない。しかし、蒲池がやった事は皆の信頼を失う大きな問題だ。差し当たっては蒲池は駅伝のメンバーから外す。県予選以降についても白紙だ。それでいいな？」

反論する人はいない。

高瀬先生は瑞希に目をやった。

「蒲池も新人戦に出るんだったら猶予はないぞ。それとも、大会まで延々と謝る練習を続ける気か？」

バネ人形のように、瑞希が顔を上げた。

「出てもいいんですか？ 新人戦……」

歩は遠くで佇む後藤田コーチを見た。

コーチも車を出さずに、ずっと様子を静観していた。瑞希の態度次第では今日、競技場に連れて行き、畑谷さんと共にトラックで指導するつもりだったのだ。

「いいも何も、予選を勝ち抜いたんだ」

瑞希は未だかつてないほど、大きな声を出した。

「ありがとうございますっ！ 先生っ！ 絶対に勝ちます！」

河合さんを始め、上級生達は ⑤ 白々とした目で瑞希を見ていた。

（甘いよね。高瀬先生は）

そんな声が聞こえてきそうだった。

*

翌日の朝練も瑞希は休む事なく参加した。

※ 瑞希が歩の家から荷物を持って出て行った時、心配だったから母と一緒にこっそり後をつけた。瑞希は何事もなく電車に乗り、寮に戻っていった。後からメールでへお世話になりました。ありがとうと言ってきたから、完全に取り越し苦労だった。

放課後も一足先に来て、シューズとスポーツ飲料の入ったバッグを持って後藤田コーチの車で門司陸上競技場へと向かう。

練習は完全に別行動になっていたので、様子を見る事はできない。

新人戦を明後日に控えた朝――。

ストレッチ用のマットを準備するのに用具室へ行くと、既に運び出された後だった。少し遅れて到着した大村さんと本郷さんが「あれ？」と不思議そうにしている。

「稔と葉が出してくれたんかな……。」と。

「違うんじゃない」

歩が更衣室を出る頃、二人はのんびりと着替えていた。

「マネージャーの先輩かも」と言い合いながら練習場所に向かうと、瑞希が一人で大量のマットを抱え、よろよろと歩いていたら驚く。

歩は「わ、私がやるから！」と大声を出し、慌ててマットを取り上げる。

「何で？ 競技場で練習やないん？」

「今日はジョグだけにするって、後藤田コーチが……」

「ふうん、そうなん」

まじまじと瑞希の顔を見る。

港ヶ丘高校にはマネージャーはいるものの、一年生部員が率先してドリンクを作ったり、ストレッチ用のマット、フォームづくりで使用するハードルやラダーなどを準備していた。だが、瑞希はいつも人に言われるまで動かなかった。

その日、隊列を作って校外を走っていると、畑谷さんが隣に並んで話しかけてきた。一緒に練習するのは久しぶりだ。

⑥ 「変わったよ。彼女……」

視線の先には瑞希の背中があった。

「以前は気が利かないところがあったけど、戻ってきてからは自主的に雑用をやってる。寮でも当番制で配膳とか掃除があるんだけど、以前の蒲池さんは指示されるのを待ってる子だった。でも、今は自分から動いてる。相変わらずノロイけど……」

「走るの速いのに、普段の動きは遅いんですね」

畑谷さんは「あはは」と笑いながら歩の背中を叩いた。

「生活がきちんとしてくると、練習中もぴりっとするね。集中力が凄いよ。ひよっとしたら、ひよっとする……かも。新人戦」

ブランクを埋める勢いでタイムを取り戻していると言う。本気で新人戦での優勝を狙っているのだ。

「四分二十一秒だっけ……。あの子の一五〇〇のベストタイム」

瑞希に視線を当てたまま、畑谷さんは呟いた。

「私も負けてらんない」

風は日を追うごとに冷たくなり、なかなか汗が出ない。長い距離を走るのに最も適した季節が近付いてきたのを実感する。

そして、駅伝の県予選までも、あまり日数がない。
じりじりとした気持ちを嘲笑うように、時間は過ぎ去って行った。

(蓮見恭子『襷を、君に。』より)

※畑谷さん……二年生。世代交代をしてチームのキャプテンになる。

※南原さん……三年生のエース。元キャプテン。歩はこの件を事前に相談していた。

※瑞希が歩の家から荷物を持って出て行った……陸上部の寮に住んでいる瑞希は、駅伝大会の後、歩の家に泊まっていた。

問1 —— 線①「胸が苦しくなる」とありますが、この気持ちを説明したものととして最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 新人戦に出場するためにいち早く陸上競技場で練習を開始したいと思っていたのに、一年生が何かをやるうとしていることに気付き、緊張している畑谷さんの気持ち。
- 2 次の駅伝大会のためにこれから一致団結して厳しい練習を積んでいこうと思っていたところに、突然瑞希が現れたので何事かと感じ、緊張している河合さんの気持ち。
- 3 自分達が誠意を見せることで瑞希を部に復帰させたいと思っているが、それを上級生達がかんたんに認めてくれるかどうかかわからず、緊張している歩の気持ち。
- 4 上級生達に謝罪をすることで部に戻ることを許してもらいたいと思うが、話すことが下手な自分にうまく気持ちが伝えられるだろうか、緊張している瑞希の気持ち。

問2 —— 線②「動きが止まり、笑顔が凍りついた」とありますが、この時の上級生達の様子からうかがえるものとして最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 甘い顔を見せることは瑞希のためにならないというきびしさと優しさ。
- 2 もう顔を見せまいと思っていた瑞希が来たことに対する驚きと嫌悪。
- 3 瑞希が復帰することで自分たちのだれかが出場できなくなるというどまどい。
- 4 瑞希が来ることは知っていたが何から話せばよいかわからないという困惑。

問3 空らん A ・ B にあてはまることばとして最もふさわしいものをそれぞれ次から一つずつ選び、番号で答えなさい。

- | | | | |
|---|------------|-----------|-----------|
| A | 1 思わせぶりだった | 2 素っ気無かった | 3 あわれんでいた |
| | 4 親切ごかしていた | | |
| B | 1 肩を竦めて | 2 肩をいからせて | 3 肩を持って |
| | | | 4 肩を並べて |

問4 ——線③「自分で自分が嫌になって、どうなってもいいと思って」とありますが、この状態を表す四字熟語として最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 自重自愛
- 2 自暴自棄
- 3 自画自賛
- 4 自業自得

問5 ——線④「グラウンドにはうなだれる瑞希の影が薄く伸びていた。それも、雲が覆い隠してしまう」とありますが、この表現は瑞希の置かれた状況がどうなったことを表していますか。最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 河合さん達上級生から前回の駅伝について厳しく責め立てられ、立場をなくしていることに加えて、陸上部の一員であることすら認めてもらえなかったということ。
- 2 上級生達から前回の駅伝のことをようやく許してもらえたことに加えて、先生とコーチから新人戦への参加も認めてもらえるようになったということ。
- 3 前回の駅伝のことを上級生達から許してもらえなかったことに加えて、歩からもこれ以上どうすることもできないとあきらめられてしまったということ。
- 4 上級生達から前回の駅伝での出来事について厳しく叱られたことに加えて、先生とコーチも助け舟を出してくれず完全に孤立してしまったということ。

問6 ——線⑤「白々とした目」とありますが、この時の上級生達の気持ちとして最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 同級生達の力を借りて今回のことを許してもらおうとするひきような瑞希に対する怒りの気持ち。
- 2 自分の実力ならば部への復帰は当然であるというごうまんな態度の瑞希に対するいらだちの気持ち。
- 3 どんなに駅伝を走ることの意味を教えてもその重要性を理解しない瑞希に対するあきらめの気持ち。
- 4 しおらしくしていたのに先生に許されたとたんに急に張り切りだした瑞希に対する冷やかな気持ち。

問7 ——線⑥「変わったよ。彼女……」とありますが、瑞希はどのように変わったのですか。次の文の空らんにあてはまることばを文中から十字でぬき出して答えなさい。

□□□□□□□□□□
られるようになった。

問8 この文章の内容を説明したものととしてふさわしくないものを次から二つ選び、それぞれ番号で答えなさい。

- 1 瑞希が自分の非をうったえ、必死に謝罪をしていますが、河合さんをはじめとする上級生達には取りつく島もなかった。
- 2 歩から上級生達に謝罪する件を事前に聞かされていた南原さんは、そのことを良く思わず、三年生達には伝えなかった。
- 3 歩の同級生である稔は、瑞希が迷惑めいわくをかけた以上、謝罪しても上級生達に理解はしてもらえないと考えていた。
- 4 歩は、謝罪をした後も瑞希が練習に来られないのではないかと不安に感じていたが、瑞希は休むことなく練習に参加した。
- 5 練習に使う道具がすでに準備されていることを知った歩は、マネージャーの先輩が準備をしたと知り、慌てて後を追った。
- 6 部活に復帰してからの瑞希は集中して練習に取り組むだけでなく、普段の生活でも先輩から認められるようになっていった。



3 次の詩を、〈現代語による意味〉を参考にして読み、後の問いに答えなさい。

椰子の実 島崎藤村

名も知らぬ遠き島より
流れ寄る椰子の実一つ

故郷の岸を離れて
汝はそも波に幾月

① 旧の樹は生ひや茂れる
枝はなほ影をやなせる

われもまた渚を枕
孤身の浮寝の旅ぞ

実をとりて胸にあつれば
新なり流離の憂

海の日沈むを見れば
激り落つ異郷の

思ひやる八重の汐々
いづれの日にか国に帰らん

(『落梅集』より)

〈現代語による意味〉

名も知らない遠い島より
流れ着いた椰子の実が一つ

故郷の岸を離れて
あなたはいつたい何か月波間にいたのか

元いた木はまだ生い茂っているのか
枝はまだ影をつくっているのか

わたしもまた渚の音を枕に
一人で浮寝の旅をしているのだ

椰子の実を手にとって胸に当てると
改めて感じられる 故郷を離れた憂いが

太陽が沈んでいく海を見ると
流れ落ちる 異国での

いくつも重なる潮に思いをはせ
いつの日にか故国に帰ろうと思う

- 問1 この詩の文体と形式として最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。
- | | | |
|---------|---------|---------|
| 1 口語定型詩 | 2 口語自由詩 | 3 口語散文詩 |
| 4 文語定型詩 | 5 文語自由詩 | 6 文語散文詩 |

問2 線①「旧の樹」とは椰子の実にとつての何を指していますか。詩の中から漢字二字でぬき出しなさい。

問3 線②「浮寝」の部分は掛詞かけことばという表現で、「水にうく」(船で寝泊まりする)と、「うし(うき)」(つらい気持ち)の二重の意味がこめられています。このうち「つらい気持ち」は直接的に何と表されていますか。詩の中から一語でぬき出しなさい。

問4 空らん に入ることばを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- | | | | | |
|-----|------------------------|-----------------------|-----|------|
| 1 星 | 2 涙 <small>なみだ</small> | 3 滝 <small>たき</small> | 4 雨 | 5 時間 |
|-----|------------------------|-----------------------|-----|------|

問5 この詩の内容についての説明として最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 詩の中の「私」は遠い島から流れてきたと思われる椰子の実を見て、現代の船旅も十分つらいのに、小さなものでも遠くまでたどり着く自然の力に感心している。
- 2 詩の中の「私」は異国の海で拾った椰子の実を手に取り、孤独こどくに心折れそうな自分をはげましながら、故郷に帰る旅に出る決意を力強くうたっている。
- 3 詩の中の「私」は椰子の実が流れてきた海岸を故郷とする人物で、これから長い船の旅に出なければならぬつらさを、広い海を前にしみじみ感じている。
- 4 詩の中の「私」は故郷の海岸に流れ着いた椰子の実を拾い、海に向こうまで一人でつらい旅をしてきた体験を思い出しながら、帰郷した安堵感あんどかんに浸ひたっている。
- 5 詩の中の「私」は旅先の海岸で見つけた椰子の実に孤独な自分の身の上を重ね、痛切な気持ちを述べるとともに、大海原おおうなばらの向こうにある故郷を思っている。

4 次の各文の空らん 2 には、 1 に入る漢字に、ある部首を加えてできた漢字が入ります。例にならって、加えた部首を書き、その名前をひらがなで答えなさい。

(例) 今年の秋の名 1 は、とても 2 なく風情があった。

1 月 2 月 答 日・ひへん

① 1 代の遺跡を発掘調査したところ、住 2 のあとを見つけた。

② 体に 1 がささったままの鳥を保護し、 2 者にみてもらった。

③ 戦争で 1 死に一生を得た人の体験を研 2 のために聞き取る。

④ 台風の被 1 によって、多くのガラスが 2 れる事態になった。

⑤ 彼は理不尽な命 1 を出し続けるような 2 たい人に見えない。

